

# 私の京都新聞評

土居 好江

川井家住宅(中京区西ノ京)が無くなったことを記事(11月27日朝刊1、社会面)で知った。京都の宝である町家が姿を消し、もう室町時代に建てられたとされる建物を元に戻すことはできない。本当に残念である。一方で、所有者の苦悩にも思いが及ぶ。

日本人は侘び寂びの美意識をもち、経年変化にも美を見出した。京都市民は365日、毎日山を見て暮らしているから、自然の変化に敏感だ。しかし、その山もビル



の間からやっと思えるような状況で、「山の見えないまちは京都ではない」と川端康成は語ったが、一日に2軒の町家が壊されていることが当たり前。古いものが当たり前の京都には落とし穴がある。古いから価値があるという半面、古いものが当たり前だから価値がないという二つの異なる考えが存在する。

200年、おくどさんで伝統的な製法により豆腐をつくる入山豆腐店(上京区)の店主は「毎日使

っているから当たり前」と、伝統を死守している。400年間、おくどさんを使い続けている鮎茶屋「平野屋」(右京区)も同様だ。さまざまな面で大変革が起こり、「真の豊かさとは」が問われる今こそ、このまちを良くするには個人で何ができるのか。まずはお互いの価値を認め合って守り合うことが大切ではないだろうか。

今年(明治維新一五〇年)首都が東京へ移ってから、京都は肩力を抜きはじめた。しかし、最近の京都人気はうなぎ登りで、メ

## 観光客・住民 共有できる紙面を

ディアに取り上げ続けられている京都の魅力に底力を感じる。

重層的な歴史文化で成り立つ京都の役割は他市とは異なると信じている。京都新聞も当然、他紙とは異なる役割があるはずだ。今こそ、京都ならではの哲学を伴う編集方針を打ち出し、京都の文化との触れ合い方や、観光の質を上げる過ごし方等を提案する紙面づくりを期待したい。更に京都の文化や魅力を語り継ぎ発信して欲しい。

観光地の混雑、観光客の分散化

等に関する記事が目立つ。観光を生業とする人も多い京都で、観光客が増えることは良し悪しの両面がある。悪いことばかりが紙面で取り上げられるのが気になる。11月25、26日に朝刊に連載された「『公害』に臨む」(地域・総合面)での「観光公害」という言葉は観光客に対して失礼ではないか。加害者と被害者の関係で捉え、両者が対立するような言葉は、京都では使いたくない。言葉の背景に愛がない。

観光客と住民が共有できるよう

な紙面をつくり、観光客予報も過去のデータから割り出し、入浴客に情報を提供してほしい。全国に先駆けて京都新聞が観光に本気で向き合い、京都ならではのモデルケースを構築されることを望む。(京すずめ文化観光研究所理事長) 土居さんの担当は6回、次回は1月13日に掲載します。 どのよしえ 京都市生まれ。大正時代から京都の案内を行う。2001年にNPOを立ち上げ、以後、暮らしの視点に重きを置き、京都ならではのさまざまな文化を発信する。